平成２９年度

自己点検・評価書
（学校評価報告書）

附属池田中学校

1　附属池田中学校の現況

(1)　学校名

大阪教育大学附属池田中学校

(2)　所在地

大阪府池田市緑丘１－５－１

(3)　学級数・収容定員

１２学級(1学年４学級)　収容定員４８０人(1学級４０人)

(4)　幼児・児童・生徒数

４８０人(男子２３９人・女子２４１人)

(5)　教職員数

校長(併任)　1人，副校長　1人，主幹教諭　1人，教諭　２０人(うち，臨時的雇用１人，内地研修１人)，非常勤講師　７人 事務職員　６人(専任２人，事務補佐員１人，臨時的事務員３人)，臨時的用務員２人

2　附属池田中学校の特徴

安全教育に取り組み，インターナショナルセーフスクール(ISS)，セーフティプロモーションスクール(SPS)の認証を受けている。 グローバル化した社会で活躍できる人材を育てるため，豊かなコミュニケーション能力と異文化への理解，自ら課題を発見し，解決する能力の育成に取り組んできた。現在は本校の教育理念に通ずるところの多い国際バカロレア教育のプログラムを研究し、その成果を教育委員会や公立諸学校等に還元，普及することを目指している。

3　附属池田中学校の役割

（1）教員養成大学である大阪教育大学の研究校である。 （2）大阪教育大学の学生の教育実習校である。 （3）現職教育への奉仕をする学校である。 （4）常に新しい教育理念と中正な教育的信念をもち、望ましい環境の内に個性を生かしながら、真の中等普通教育を実施することを目指している。 （5）一般生徒、国際枠生徒（帰国生徒、在日学国籍生徒）、学校災害特別研究生徒からなる混合学級で授業を行い、新しい教育の開発を目指している。

4　附属池田学校の学校教育目標

人権尊重の精神を基に、自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い、激しく変化する社会に主体的に対応し、国際社会に貢献できる、生きる力に満ちた生徒の育成

5　附属池田中学校の学校教育計画

(1)共同研究「つなぐ力を持った子どもの育成」の推進および各自の研究力の向上

◎学習指導要領改訂を踏まえた、新しい時代に必要となる資質･能力の育成を意識した共同研究の推進

◎各教科・領域における評価(評価基準・評価規準)研究及び積極的な研究の継続・推進

◎国際バカロレア(IB)教育の推進及び研究

(2)授業力の向上

◎質の高い授業研究・研究協議会の充実

◎言語活動の充実，学校図書館・ICT の活用，生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり

(3)安全・安心な学校づくり

◎ISS 校，SPS 校としての取組の充実と国内外への発信

◎安全教育カリキュラムの確立

◎安全管理の見直し・充実

(4)自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進

◎自己肯定感を育み，互いを尊重しあう人間関係の育成

◎異なる文化や価値観を認め合い，自他ともに大切にする態度の育成

(5)生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導，規範意識の向上と生活規律，学習規律の徹底，いじめや不登校への対応

◎生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施

◎生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり

◎いじめ・不登校のない学校づくり

(6)教育実習の充実

◎教職を望む学生の資質の向上

(7)適切な組織運営，開かれた学校づくり，保護者・地域との連携

◎機能的・機動的な組織運営

◎開かれた学校づくりの推進

◎学校評価の充実

◎保護者・地域との連携

6 附属池田中学校　平成29年度　重点目標(評価項目)，具体的な取組内容(評価指標)・評価結果（その1）

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	1．共同研究「つなぐ力を持った子どもの育成」の推進および各自の研究力の向上	

本年度の重点目標（評価項目）	具体的な取組内容（評価指標）	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)学習指導要領改訂を踏まえた、新しい時代に必要となる資質・能力の育成を意識した共同研究の推進	各教科において，小学校・高校と連携を図り，カリキュラムづくり・授業づくり・評価研究を行う。また，研究協議会の充実を図る。	・本年度は小中高別開催ということもあり、例年よりは連携をとることが難しかったように思える。その中でも各教科・領域で話し合いの場を持つことは定着できていると感じる。	・IBとの関係性もあり小中高連携との同時に取り組むことが今後の課題である。学習指導要領とIBの評価について、共に確立していき研究部が推進していかなければならない。	B	IBの取り組みで先行する中学が、小中高の連携を一層リードしていくことを期待している。 中学校での教科・領域における研究は、概ね適切である。	B	次年度、「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)」の委託事業に小中高で取り組む計画がある。これまで以上に連携を取り、カリキュラムの整備に当たる。	研究
(2)各教科・領域における積極的な研究の継続・推進及び国際バカロレア(IB)教育の研究及び推進	①科学研究費助成事業(奨励研究)に教諭の半数以上応募し，25%以上の採択率を達成する。また，研修報告会を活性化し，学びの共有化を図る。	・今年度は例年よりも1ヶ月早い応募時期であったが、10名の科研応募があり、昨年度の6名を上回った。教諭の50%でもあり、応募数は目標を達成した。現在はまだ結果が出ていない。 昨年度は採択率が17%で、一昨年度の20%を下回っている。	・教員一人一人の努力に負うところが大きい。過去に採択された教員や、管理職がアドバイスできる環境を構築したい。	B	教員が多忙を極める中での科研費助成事業への取り組みで、多くの困難を伴うことと思うが、今後もできる範囲で目標達成を目指してほしい。	B	管理職・経験者がアドバイスし、大学の教員の指導も仰ぎ、今年よりも十分に準備ができる環境を整える。	研究
	②国際バカロレア(IB)教育について，全教員が共通認識をもちながら理解を深め，実施のための準備を検討する。	・IB委員会の教員が率先して研修会を実施しているので、全教員の共通認識は徹底されている。	・来年の実施に向けて非常勤講師へのフォローを年度末までに十分行っていく必要がある。またIB教育を推進し、伝達していく複数の教員の育成も必須である。	A	IB委員会のリーダーシップで全教員の共通認識が徹底され、大きな成果が上がっていると感じる。	A	今年度中に必ず認定を受け、IBの授業を実施していく。	国際研究

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	2．授業力の向上	

本年度の重点目標（評価項目）	具体的な取組内容（評価指標）	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)各教科・領域の本質となる「知」を鍛える授業の実践	授業研究会を精選し，「21世紀型スキル」をテーマにした研究授業・研究協議を行うことで，授業研究会の質を高める。	・授業研究会においてユニットプランナーの作成も義務として実施した。指導案とユニットプランナーの作成は負担がかかることではあったが、多角的な視点で授業研究できるなどのメリットも多々あった。	・達成状況とは反面、負担の大きさも伺える。今年度においては一人1回の研究授業を行い、研究校であることから継続していくべきだが、なにかしらのスリム化(行事も含む)を検討すべきとも思う。	B	大きな負担を伴う中で、授業研究会の質を高める目標が達成されていることは、高く評価されると思う。負担の軽減についても考えてもらいたい。	B	これまでは学期ごとに作成していたシラバスを、前年度末に年間を通して作成することで、先の見通しを持ち、計画的に授業実践に打ち込める体制を整える。	研究
(2)生徒の思考力・判断力・表現力を育む授業づくり	ICTを活用した工夫ある授業を展開し，生徒の学校評価アンケートから，90%以上の生徒に授業に関して満足感をもたせる。	・学校評価アンケートからも生徒の満足度が高いことが伺える。活用方法も年を追うごとに向上しており、授業交流することで相互啓発につながっていることが効果を発揮していると思われる。	・ICT機器の管理・メンテナンスが必須である。メンテナンスなど上手くいっておらず、活用できない事案もある。また教員・生徒の使用モラルの向上を図っていく必要もある。	A	生徒の満足度も高く、ICTを活用した授業は工夫があり、意義の大きいものであると感じる。	A	スクールクラウドの導入によって、よりスピーディに、より確実に、ICTを使用した生徒の学習支援を充実させたい。	研究

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	3．安全・安心な学校づくり	

本年度の重点目標（評価項目）	具体的な取組内容（評価指標）	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)ISS校，SPS校としての取組の充実と国内外への発信	生徒会・保護者等と連携した組織的な学校安全の取組をさらに推進するとともに，国内外にその取組を発信する。	PTAと連携を図りながら，学校安全の推進を図ることが出来た。また，SPSの認証校として，外部への講演や学校安全の手引きの配布等で学校安全の発信を行うことが出来た。	生徒会活動の取り組みを活性化しながら，生徒による学校安全の取り組みについて活性化を図る。	A	全国の学校の模範となるよう、引き続き学校安全の推進に取り組むことを望む。	A	生徒会活動における安全の取り組みを公立学校などに紹介して、地域の学校安全に貢献していく。	安全
(2)安全管理の推進及び安全教育の充実	学校安全マニュアルを改訂し，実際に即した年2回以上の防犯訓練，防災訓練の実施と評価の充実を図る。また，安全教育の系統的なカリキュラム化を図る。	学校安全マニュアルの改訂を適宜行った。また，訓練についても年2回以上の防犯訓練・防災訓練の実施を行い，生徒アンケートや教師に向けた振り返り用紙にて評価を行うことが出来た。安全教育についてのカリキュラム化は保健安全委員会を開いて，別様方式で各教科から安全の内容について整理を行い，教科化に向けた方向性を確認した。	別様を用意して，不足している部分を補完する形で安全学習のカリキュラム化を図る。	B	学校安全マニュアルの適宜改訂、防犯防災訓練の実施等、地道に活動に取り組んでいることは高く評価できる。	B	生徒自身が自分で判断し、行動できる力を育てるような、安全教育のカリキュラムづくりを進める。	安全

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	4．自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進	

本年度の重点目標（評価項目）	具体的な取組内容（評価指標）	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)自己肯定感を育み，互いを尊重しあう人間関係の育成	①生徒の学校評価アンケートから，90%以上の生徒に学校生活に関して満足感をもたせる。また，学級や学年の活動の場において，他者と関わり，互いの考えを交流したりする場面をできる限り設ける。	項目1の「楽しい学校生活が送れている」では90%以上の生徒が肯定的に答えており，おおむね満足して学校生活を送っていると思われる。当初はぎこちなかった人間関係も、さまざまな行事などを経て深まりつつある。 しかしながら、規範意識の低い生徒や自己肯定感の低い生徒などが散見される。現状で満足しきっている、もしくは学校生活に対してすでにマイナスなとらえ方をしている者がいることがうかがえる。	必修教科の授業のみならず、総合や学活などの時間を通して「対話」「合意形成」「振り返り」「チャレンジ」を可能にするプログラムに多く取り組んでいく。PDCAサイクルに基づくグループワークなど、生徒たちが楽しみながら活動でき、そして学びの多い活動を継続的に行って集団を醸成していきたい。	A	概ね生徒たちは学校生活に満足感を持っているようであるが、最後の一人まであきらめることなく指導していってもらいたい。	A	教員同士のコミュニケーションを密にし、生徒を中心においたチームとしての学校の機能をさらに強化したい。	学年

6 附属池田中学校 平成29年度 重点目標(評価項目)，具体的な取組内容(評価指標)・評価結果(その2)

自己評価		学校関係者評価	
A	高いレベルで達成できた	A	とても適切である
B	達成できた	B	おおむね適切である
C	一部達成できなかった	C	あまり適切でない
D	ほとんど達成できなかった	D	適切でない
		E	判定できない

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	4．自主・自律の精神の涵養と様々な他者との人間関係を深める取組の推進	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(2)異なる文化や価値観を認め合い，自他ともに大切にする態度の育成	①生徒の学校評価アンケートから85%以上の生徒に国際枠生徒の経験が生かされている実感をもたせる。また，国際理解の場の充実を図る。	今年度の生徒の学校評価アンケートの結果は84%であり，数字的な目標には僅かながら至らなかったが，昨年に比べる2%上昇しており，改善されてきていると考えられる。	記述の方では「国際枠生徒を複数クラスに」と希望する意見が挙げられており，「国際枠生徒ともっと交流したい」と考えている生徒が一定数いると思われる。(国際枠生徒が2クラスに別れている3年生の結果は90%近い値である。) このことから，国際枠生徒と一般の生徒の交流の場や，国際枠生徒に経験を語らせる場を学年ごとに設けられないか検討していきたい。	B	クラス配分の際に配慮が必要なことから，全てのクラスが同じレベルで交流することが難しい中で，アンケートの結果は達成率の高さを示している。 その中で，今後も国際理解教育を進めていってもらいたい。	B	本格化する国際バカロレア教育のプログラムの中で，海外における教育を経験している国際枠生徒の活躍の場を，さらに増やしたい。	国際
	②真の自主・自律の確立，他者理解を深め，人としての誇りがもてる道徳教育を計画的・組織的に推進する。	約80%の生徒は人としての生き方を考えるうえで有効な時間になったと回答しています。しかし，実際は個人差があるのも事実で，約20%の生徒の数を減らすための工夫が必要である。	道徳としては幅広いう分について教材を用意し，考えさせた。一方総合の授業でも人権を中心に，身近なことから国際的なことまで格差や差別について考えさせた。生徒たちは少しずつ社会の一員として参加し，そこでのモラルなど考えている。来年度に向け更に意識や考えが深まるように，コミュニティープロジェクト等も活用し取り組む。	B	互いの人権を尊重し、認め合うことは、グローバル化の進む世界で生きていく上で極めて重要な、人間としての基礎だと思う。 道徳の教科化に伴い，さらに全職員が研究を進めてもらいたい。	B	国際バカロレア教育における「10の学習者像」が生徒に浸透してきている。教育のあらゆる場面で、生徒の学びを「10の学習者像」に結びつけることで、同時に道徳的な価値について考える機会をもたせる。	道徳

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	5．生徒との信頼関係を基にした内面に迫る生徒指導，規範意識の向上と生活規律，学習規律の徹底，いじめや不登校への対応	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)生徒理解に基づく積極的な生徒指導の実施	生徒の学校評価アンケートから，85%以上の生徒に教員の生徒理解に関して満足感をもたせ，体罰を感じる項目については5%以下にする。また，共通認識・共通実践および保護者・関係諸機関と連携を図った対応を図る。	昨年度と数値的には同じ状況であった。また，体罰については3年間の中で最も低い値となったが，目標の5%以下とすることはできなかった。部活の指導については，全般的に留意した指導がなされていると考えるが，数値を達成できるよう教員への啓発を続けたい。関係機関との連携については，行うことが出来，家庭への働きかけが出来た。	生徒理解を高めるために，Q-Uも活用しながら，生徒へのはたらきかけを組織的に行えるようにする。関係機関との連携については，学校と関係機関の連携は十分出来ているが，保護者が関係機関に進んでいかないケースもあるため，関係機関の説明をていねいにしていくようにする必要があると考える。	A	生徒が抱える内面の問題全てに適切に対応することは難しいと思うが、Q-Uの活用等多面的な取り組みをしていると評価できる。 今年度は不審者情報などで池田市関係機関と連携を図れたと聞いている。 「休罰を感じる」との項目が気になる。	B	次年度はQ-Uの実施時期を検討し、生徒理解に最も効果的に取り入れる。また、教員研修をもって、実施した結果を日々の教育に生かす。	生徒指導
(2)生徒の規範意識の醸成および自他を尊重する集団づくり	生徒指導委員会を軸に情報の共有化を図り，共通した指導を実践するとともに，生徒のリーダー性・自発性を育むように生徒会の活性化を図る。	生徒指導委員会を中心に情報共有を図ることができた。学年間においても連携した活動ができ，共通した指導を実践することができた。また，生徒会については，様々な活動を主催して行い，活性化を図ることが出来た。	生徒指導委員会は通常の時間割では隔週に設定されているが，行事等による時間割の都合で間隔が開いてしまい情報収集がしづらい時期があったので，運用について検討を行う。	A	生徒会も活発に活動しているようである。高い成果を挙げていると思われる。	A	生徒指導委員会を定期的に開催し、教員の共通理解をはかり、積極的な生徒指導を進め、生徒の自主性を生徒会の活動を通してさらに高めたい。	生徒指導(生徒会を含む)
(3)いじめ・不登校のない学校づくり	Q-Uやいじめ等のアンケートを活用し，集団を評価，向上させる。また，「特別支援委員会」を充実させ，課題のある生徒の「個別の指導計画」「個別の教育支援計画」を作成し、チームとしての支援体制をとる。	Q-Uの実施やいじめアンケートを活用して，集団の評価や生徒の状況を把握することが出来た。また，専門の講師の先生を招聘して，分析の方法についての研修を行うことが出来た。全体的には，集団の向上を図ることが出来たが，一部において課題が残った。	校内研をや活用の資料を充実して，Q-Uの活用を深めて生徒理解を促進する。実施時期を検討して、より高い効果が得られるように計画する。	B	一人の生徒もいじめに苦しむことがないよう、きめ細かく生徒たちを指導してもらいたい。	B	アンケートの内容・回数などを見直して、有効に活用する。	生徒指導・メンタル

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	6．教育実習の充実	

(1)教職を望む学生の資質の向上	教科指導や学級指導において指導教員を中心に個々の教育実習生の課題を把握し，各教科・実習部・管理職・大学と協力体制をとる。	教務課免許・実習係と連絡を密に取り、学生の実態把握やこちらで掴んだ学生の様子で報告すべき事項に関して共有ができた。	学生の帰宅時間が遅くなりすぎないように全体でコントロールをしながら、実習の質を保つようにする。	B	毎年多くの実習生を受け入れ、指導されていることに敬意を表する。 概ね良好な指導をしていると思われる。	B	帰宅時間が遅くならないように、指導の柱を立てて各教科の指導に取り組む。	教育実習

学校教育目標	人権尊重の精神を基に，自己を律し他者との関わりの中で思いやりのある豊かな心を培い，激しく変化する社会に主体的に対応し，国際社会に貢献できる，生きる力に満ちた生徒の育成	自己点検評価を主体的に行う分掌
学校教育計画	7．適切な組織運営，開かれた学校づくり，保護者・地域との連携	

本年度の重点目標(評価項目)	具体的な取組内容(評価指標)	自己点検評価			学校関係者評価		学校関係者評価を踏まえた改善策	
		達成状況	改善点	評価	意見・理由	評価		
(1)機能的・機動的な組織運営	①保護者の学校評価アンケートで90%以上の保護者が教育方針等に対して満足感をもつような学校運営をする。	・保護者のアンケートにおいて「附中の教育方針、教育目標、教育指導等に共感できる」という項目で、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の回答が90%以上となった。	・より多くの保護者に満足感をもってもらえるよう運営していく。 ・情報を発信する機会を増やし、学校運営への理解を得られる努力をする。	B	IB通信の発行も始め、保護者のアンケートで高い達成率を上げている。	B	引き続きIB通信を発行するとともに、集会など、機会を捉えて学校の方針を保護者に伝える。	運営・教務
	②ミドルリーダーが各分掌においてリーダーシップを発揮し，学校組織として報告・連絡・相談の機能を充実させる。	学年・各分掌の主任がそれぞれにリーダーシップを発揮し、生徒の指導や教育上の諸問題に当たることができた。管理職への報告・連絡・相談も適切に行われ、組織として課題解決をすることができた。	国際バカロレア教育中等教育プログラムを導入するにあたり、より教育効果が上がり、かつ教員の働き方改革につながるような、学校を改革する視点をもって組織の見直しを進めていく。	B	組織運営面では，概ねスムーズに機能していると思われる。 IBの導入で教員の負担もますます大きくなっていくであろうから，行事の見直し等，負担軽減策も必要である。	B	運営委員会が学校経営の中核となるよう、実施時期を検討し、ミドルリーダーのリーダーシップを育てる。	運営・教務
(2)開かれた学校づくりの推進	学習評価等の規準や進路情報，公文書等を適切に発信する。 また，学校HPのリニューアルを行い，より積極的，よりわかりやすい学校情報(学校評価を含む)を発信する。	・「評価説明会」を年度初めに行い、わかりやすい透明な評価を生徒や保護者に伝えるよう心掛けた。また進路指導主任や学級担任とも連携しながら、適切な進路指導を行った。 ・学校HPを必要に応じて随時更新し、学校情報を発信できた。	・シラバスの書式の統一を図る。 ・学校HPのさらなる拡充を図る。	B	学校HPは以前よりわかりやすくリニューアルされている。 シラバスの書式の統一は学習評価の透明性の向上につながる。	B	学習の手引きを改定して、よりわかりやすく細やかな情報の発信をする。	教務・進路
(3)保護者・地域との連携	①保護者の学校評価アンケートにおいて，90%以上の保護者が授業参観や学校行事等に参加しやすいと感じるようにする。	・保護者のアンケートにおいて「授業や行事に参観したり、懇談する機会を設け、保護者は参加しやすい」という項目で、「よく当てはまる」「やや当てはまる」の回答が90%以上となった。	・さらに内容を充実させて、参加してよかったと感じられる授業・行事を企画していく。	B	保護者の満足度は高い水準にあり、開かれた学校づくりに尽力されていると思われる。	A	授業参観にあわせてPTAの行事を企画したり、生徒の学習の成果を見てもらえるような工夫をし、学校に足を運んでよかったと思われるようにつとめる。	教務・PTA
	②PTA活動が活発になるよう学校として支援を行う。(保護者の学校評価アンケートにおいて，90%以上の保護者がPTA活動に対し満足度をもつ)	・保護者のアンケートにおいて「附中のPTA活動は活発である」という項目で，「よく当てはまる」「やや当てはまる」の回答が95%以上となった。	・教員もPTAの一員として、PTA活動への参加率を高める。	B	PTA活動に対する学校側の支援には頭の下がる思いである。 今後もPTA活動への参加が増えることを期待する。	A	多忙な保護者が多い中で、時間に制限があっても参加しやすい、少しでも参加したいと思える行事のあり方を工夫する。	教務・PTA